

おそらく、僕だけ違うゲームをしている。

カーラ

性別：女 種族：只人族

始まりの町「ユヌ」の
職業ギルドの職員。
トウノが資料室で
死にかけていたところを
発見する。

ローザ

性別：女 種族：只人族

ユヌの裏通りにある
宿屋の女将で、カーラの母。
人柄がとてよく、
荒々しい冒険者とも
言い合える豪胆な性格。

ギル

性別：男 種族：只人族

ユヌの職業ギルドの
サブマスター。
サブマスターではあるが
仕事に追われていて、
どこかたびれている。

コノル

性別：男 種族：小人族

ユヌの冒険者ギルドの
ギルドマスター。
明るく気のいい性格。
《鑑定眼》を持っている。

サーリハ

性別：女 種族：只人族

ユヌの傭兵ギルドの
サブマスター。
落着きのある風貌と
振る舞いが、
愛馬に乗ると……？

ゾーイ

性別：女 種族：？？？

ユヌの職業ギルドと
傭兵ギルドのギルドマスター。
顔に大きな傷があり、
ただならぬ雰囲気
醸している。

あぬ丸

性別：女 種族：只人族

「動物学者見習い」の
プレイヤーで、
トウノの数少ないフレンド。
もふもふが大好きな
肉弾戦プレイヤー。

鍋の蓋

性別：男 種族：巨人族

「魔物学者見習い」の
プレイヤーで、
トウノの数少ないフレンド。
アルブという名前の従魔を
連れている。

characters



バラム

性別：男 種族：只人族

『鉄鎧の大剣使い』で
名が知られる傭兵 NPC。
一緒にパーティを組むには、
厳しい条件をクリアする
必要があるらしい。

遠野嗣治 (とおのつぐはる)

プレイヤー名：トウノ

性別：男 種族：只人族

超がつくほど読書中毒な青年。
新作 VRMMORPG『Arca Stora』を
はじめるも、
冒険や戦闘を一切せず、
ひたすら読書に没頭する。
ゲーム内の職業は「編纂士」。

やわらかな日差しが降りそそぐアンティーク調の家具に囲まれた部屋で、僕は買いだめていた本を暇つぶしに読んでいる。

ここは僕の記憶のなかにある “実際に存在したはず” の部屋を再現した、仮想空間にあるプライベートルームだ。

仮想空間にプライベートルームを持っていること自体はなにも特別なことではない。

社会生活のほとんども ヴァーチャルリアリティ V R 技術を用いた、仮想空間で行うようになった現在。プライベートルームを二つも三つも持っていたり、現実では到底再現できないような内装にしていたりする人も多い。

そんな世間の流れからすれば、僕のプライベートルームのように、現実で探せばまだありそうな、なんの変哲もない内装のほうが珍しいのかもしれない。

だが、考えてみてほしい。四六時中過ごす部屋に、奇抜さや無駄に発光したり浮遊したりするインターネットが必要だろうか？

疲れたら現実にもどればいいといわれるかもしれないが、僕の場合それはとても、絶望的にむず

プロローグ

かしい。

僕、遠野^{とおの}嗣治は十歳のころから八年ものあいだ、この『仮想空間のみ』で過ごしている。

もしかしたらだれにでも降りかかりうる不運と、そんな不運のなかのとても不幸運のめぐりあわせによって、現実の僕は八年間、意識は認められているが身体をビクリとも動かせない状態で、生命維持機能付きのVRベッドに横たわっている。

……すでに起きてしまったことだ。嘆いても仕方がない。

幸いだったのは、僕は読書さえできれば健全な精神を保てるたち、であつたことだ。

生まれたときにはすでにさまざまな分野が仮想空間に進出していて、とくに電子化が進んでいた書籍関係は仮想空間のほうが充実していた。

この世界には読みきれないほど本がある。それを片端から読めるだけで満足だった。

しかし、最近周囲が少々さわがしくなった。

僕があまりに読書と最低限の生活……主に学業と睡眠、ときどき依頼されるバイトのようなものしかせず、学校の同級生との交流をほとんどたなかつたことで、思春期の精神の生育的にかがなものと問題視されてしまったらしい。

「今さらでは？ もう十八歳になったんだが？」と思わないでもなかったが、読書時間を削られすぎなければそれ以外はあまりこだわりがないので、提示された他者との交流プランのいくつかのなかから『あるもの』を選んだ。

それが、新作VRMMORPG『Arca^{アルカ} Storya^{ストーリー}』通称『アルスト』と呼ばれるものだ。

ちなみに『MMORPG』とはVRが発達する前から親しまれていた『大規模多人数同時参加型オンラインロールプレイングゲーム』のことだ。

このゲームは、世にだしたゲームはかならず各賞を総なめにするというゲーム開発の雄である企業と、ワールドシミュレーター開発の企業が共同開発し、ついでになにやら僕の身体の面倒を見ている企業も関わっているらしい。

開発が発表されて数年、アルストは世界中から注目の的だった。

なかでも注目をあつめたのは、ワールドシミュレーターの技術が注入されたことによって、世界中のゲーマーやファンタジー好きが夢に見た『本物のような異世界』が作られ、圧倒的なリアリティのあるプレイ体験が実現したことだ。

僕はほとんどゲームをしないが、そういうものがSF感覚で描かれたライトノベルは読んだことがある。だからある程度想像はできている……はずだ。

しかし、なぜ普段ゲームをしない僕がこのプランを選んだのかというと、ゲーム情報を収集していたとき、あることに気づいてしまったからだ。

そこまでリアリティのある世界ならば、独自の歴史、文化から生まれた本が山のように存在し、読みまくれるのでは、と。

なんなら僕はゲームプレイを推奨されただけなので、交流のほうはとりあえず努力目標ということにおいて、プレイをしているあいだずっと読書しまくれるのでは、とも。

そんなこんなで僕のモチベーションは俄然あがり、ついに今日がアルストのサービス開始日だ。

思ったよりもインストールに時間がかかるようで積み本に手をつけながら待っていたのだが、それもそろそろ終わりそうだ。

僕は本をしまい、宙に浮かぶゲームのサムネイルとインストール進捗しんちくゲージに目をやる。

この世界とはまったく違う観念で生まれた本を読めるのかと思うと、普段まったく感じることはない胸の高鳴りを感じた気がして、自然と口角があがった。

第一章 ゲームプレイ開始

インストールが終了したので、さっそくアルストを起動する。

先ほどのまでのプライベートルームから一転、空間全体が暗転し、まあまあの浮遊感のあと荘厳な音楽とともにあらすじ紹介が始まった。

最近のファンタジー映画にも匹敵する映像美には、素直に感動して見いつてしまう。

このクオリティでゲームをプレイできるのだとしたら、あまりゲーム事情にわしくない僕でも感嘆する。開発者に畏敬の念が湧いたし……ちょっと変態すぎないか？ と思った。

オープニングが終わったところで、突如地球のような青く丸い星と宇宙空間の狭間のような景色に切りかわる。

『Arca Storia』によろこそ！ この世界でのきみの名前と姿を教えてほしい！
「っ!? びつくりした……」

突然、自分以外の声がして身体がびくりと跳ねる。

目の前にはいつの間にか黒いローブを深くかぶった、口元しか見えない人物が現れていた。

おそらく、先ほどの歓迎の言葉もこの人物が発したのだと思うが、音が四方八方からきこえた気がして、実のところそちらのほうにおどろいていた。

「あははっ、おどろかせてしまったかな？ ごめんね」

僕のおどろいた様子を見て、ローブの人物が「うっかり」というように手を頭にやる。

声からしておそらく男性なのだろうその人物は、あやしく陰気そうな印象の見た目とは裏腹に、口元だけでも愉快そうなのがわかるほどニコニコして言動が妙にフレンドリーで、なんともチグハグな印象だった。

「はあ……まあ、大丈夫です」

「そうかい？ そうしたら気をとり直して名前を決めてみよう！」

僕がため息をつきながらこたえようと、ローブの人物は右手をかざした。

その直後、目の前に〈プレイヤー名を入力してください〉というメッセージと入力ウィンドウが出現したので、「トウノ」と本名をほんの少し変えて入力する。ネットリテラシー的に匿名性を大事にすべきなのは理解しているが、現実との関わりがほとんどない僕は気にするだけ無駄だろう。苗字のほうはそんなに珍しくはないし、「オ」を「ウ」にして違う苗字に誤解されるようにもしている。

「トウノか、いい名前だね！ さあ、つぎはこの世界でのきみの姿を教えてほしい！」

僕の名前入力に反応して、ローブの人物がつぎに「この世界での姿」つまりアバター作成をうながす。

アバターはゲーム側で用意されたサンプルを元にするか、自分の見た目をスキャンして編集するかをきかれたので、自分の見た目をスキャンするほうを選んだ。とくに変身願望はないから、普段

使っている「身体」に近いほうが動きやすいだろう。

それに自慢じゃないが、フィジカル面は昔も今もからつきしだ。どんなに仮想空間が発展しても、仮想空間での身のこなしは現実の運動神経の影響からは逃れられないらしい。ままならないものだ。しばらくすると、目の前に現在の僕の身体と思われる立体像が現れた。

生命維持機能つきVRベッドの謎機能により筋力が衰えずきよう維持されているので、病的に細いというわけではないが、一般的な感覚でいえばヒョロヒョロだろうか。普通に生活できいたとしてもこのくらいの体型だったのかもしれない。

身長は百七十センチに少し届かないくらいで、成長期前に意識があるだけの昏睡状態になったにしては、むしろよくここまで成長したものだと思う。

とりあえず年齢、性別、身長、顔の造作はノータッチだ。顔のよさはザ・平均と自負しているが、ほかの人がいうには人相がやや悪く見えるらしい。三白眼気味だからだろうか？

髪と瞳の色は、ほんの少しだけ色素が薄い以外はだいたい標準的な東洋人カラーなのが、さすがに少し変更しよう。

髪はオリーブ色に、瞳はフォレストグリーンにした。元の色から大胆に明るくしてみたんだけど、髪型はなにもしなければ無造作な短髪なのがどうしようか。

前髪をおろしていると、やや悪そうと評される人相がより強調されそうな気がしたので、前髪だけあげることにした。よし、見た目はこんなものでいいだろう。

「うんうん、姿も決まったようだね。つぎは種族と職業を決めていこう！」

ロープの人物は相変わらず必要以上にフレンドリーな調子でつぎの設定をうながしてくる。
「それなんですけど、あなた？ にプレイスタイルを相談すれば、オススメのビルド？ を提案してもらえるときいたんですが……」

もうこのあたりはよくわからず、疑問符だらけでたずねた。
なぜこんなことをたずねているのかというと、公式サイトの情報によれば、このゲームは職業をかなり細かく選べるようなのだ。それだけでなく種族との相性で、さらに細かく設定された上位職業に成長するらしい。ゲームに慣れていない僕にとつて、初期の職業を決める時点で難易度が高いんじゃないかと不安に駆られていた。

しかしそこは初心者でも進めやすいように、サポートAIにやってみたいプレイスタイルを相談すれば、なるべくそれにあった種族や職業、能力のあげ方などを提案してくれるというのだ。

「うん！ やってみたいプレイスタイルがあれば、なるべくそれに沿ったビルドを提案するよ！ ただし、一度提案モードを選択したらマニュアルビルドにはできなくなるから注意してね」

まず、ロープの人物はやはりサポートAIだったようだ。

ロープの人物あらためサポートAIは、僕の質問に注意事項をまじえて丁寧に教えてくれる。……それはまあ、当たり前か。

「はい、提案モードで大丈夫です」

マニュアルビルドができなくなってもとくにかまわないので了承する。

ちなみに、提案モードも先ほどの注意事項も、しつかり公式サイトに書いてあった。

「了解！ そうしたらトウノがこの世界でしてみたいプレイスタイルを教えてくださいかな？」

サポートAIが僕のほうに身体を傾けてプレイスタイルをきいてくる。

「やりたいプレイスタイル」だけは、はっきりと決まっている。

「僕のやりたいプレイスタイルは『この世界の本や書物を、できるだけたくさん読みたい』になるんですが……どうでしょう？」

さすがに多数派とはいえないプレイスタイルを望んだ自覚はあるので、最後のほうは若干尻すばみになってしまった。

「なるほど！ 考えてみるから少し待ってね！」

僕の希望をきいたサポートAIはそういうとあごに手をあててうつむき、考えはじめた。

「……できた！ トウノがやりたいことをするにはこんなビルドがいいと思うんだけど、どうか？」

さほど時間をおかずに顔をあげたサポートAIは、僕の目の前にウィンドウを表示させた。

名前…トウノ

性別…男 種族…たひと只人族 職業…へんげん下級編纂士見習い 技能…《分析》《記録》

……ファンタジーゲーム初心者でもなんとなくわかった。この職業、絶対にドマイナーだ。

しかし気をとり直して、サポートAIが提案してくれたビルドを確認していく。
種族は『只人族』という見慣れない言葉だが、公式サイトの説明によるといわゆる普通の人間のことを指すようだ。ほかにもファンタジーではお馴染みのエルフやドワーフなどいろいろある。

只人族はアバターの使用感が普段と変わらなそうなのでありがたい。
そして問題の職業だが……『下級編纂士見習い』とは？

下級で見習いだから……まあ、ペーパーのなかのペーパーということだろうか。

『編纂士』という職業は……『編纂』の意味からいって、そのうち現存する書物の内容を取捨選択して整理した内容を出版できるようにでもなるのだろうか？

出版にそれほど関心はないが——もちろん、本を生み出してくれる方々には毎日尊敬と謝意を捧げている——とはいえ、『編纂』の過程でさまざまな読みものに触れられそうなので悪くはない。

「職業は下級編纂士見習い、ですか。この世界にあるのかはわかりませんが、司書などをオスメされるのかと思っていました」

「ああ、司書という職業もあるよ！ 司書は領主や国に雇われて図書館や書庫の管理をする職業なんだけど、雇われだからあまり融通が利かなくてね。トウノの望むプレイスタイルや自由度を求めるなら、ギルド連盟の領分の編纂士かなって思ったんだ」

職業について正直な感想を口にする、立て板に水のごとくスラスラと司書と編纂士の違いについて説明してくれる。

「ギルドには協力的であることをオススメするけど、強制でもなければひとつの地域に縛られる必

要もない。ギルドは世界各地にあるから、きみにはこちらのほうがうってつけじゃないかな？」

どうやら司書と編纂士は所属のようなものが異なるらしい。公式サイトでもおおまかな国や領土の勢力図、ギルド連盟についても説明されていたが、あまりしがらみにとらわれずに自由に冒険を乐しまいたい場合は、職業にあつたはずのギルドに加入したほうがいいと勧められていた。

まあ、たいていのプレイヤーは自由に冒険したいだろう。

僕は別に冒険がしたいわけではないが、人の生活圏外の場合にも読みものはあるだろうから、いくらかは冒険なり探索なりをしないとイケないだろう。

「……なるほど。そういうことなら、僕には編纂士のほうがいいかもしれないです」

「ふふふ、そうだろう？ あらゆるものを見たいと望むのなら、自由は必要不可欠さ」

サポートAIが得意げに胸をそらす。

「ちなみに技能の《分析》と《記録》というのは『職業専門クエスト』を達成するのに最低限必要な技能になっているよ。たくさん使えば使うほど技能が成長してできることが増えるから、積極的に使ってみてね」

……サポートAIは僕がゲームに不慣れなことを察したのか、つぎの質問をする前に技能の解説をしてくれた。ありがたい。

「技能は成長もするし、その結果、より上位の技能に変化することもある。転職をしたり、技能書を手に入れたり、トウノ自身の行動によってまったく新しい技能を手に入れることもできるから、いろいろ試してみるといいよ」

「ふうむ、経験により習得できるすべての技術に名前がついている、ということでしょうか？」
「そんな感じ！」

理解度を確認するためにきくと、サポートAIはにこやかにサムズアップをした。
……よく考えると、さらっとゲーム内のプレイヤーの行動をすべて記録して技能の習熟度を把握して管理できるといっている。

やはり変態の所業では？ ……賞賛の意味で。

その後もサポートAIは、不慣れな僕にいろいろと教えてくれた。

職業についても、所属する組織に実績を認められるなどのさまざまな方法で、上位職や変わった職業につけるらしい。

そして職業が設定された影響か、いつの間にか僕のアバターの服装が変わっていた。

丈が長くゆったりとした中世の学者風の服装に、腰にはベルトが巻かれている。

簡素なものだが、これがいわゆるプレイヤーの『初期装備』というやつなのだろう。

「あと私からのアドバイスとしては、トウノの望むプレイスタイルの追求と、きみの職業を技能ふくめて磨くことをオススメするよ。まあ、強制ではまったくないけどね」

「それは……もちろん。僕のしたいことですし、それにあっているといわれた職業なので」

読書に関してはオススメされようがされなかるうが、だれにとめられても強行するかまえないので、大きくうなずいた。

「うんうん、欲望に素直でよろしい！ あとはそうだなあ……この世界の交流可能な者たちとは、

現実の知人や友人に接するのと同じように接してほしいかな。それと、これはゲームだからきみたちプレイヤーは死んでもチェックポイントで復活できるけど、きみのプレイスタイルにはあまり死に戻りはしないほうがいいと思う、といっておこう」

今までの、ともすればヘラヘラとした様子から一転、サポートAIは少し真剣な様子でいった。

ゲーム初心者で運動音痴の僕がどこまで死なないでいられるかわからないが、善処はしよう。

「……わかり、ました。気をつけます」

「うん、でも楽しむのが一番だから、トウノだけの楽しさを追求してみてよ！」

そういつてサポートAIは、口だけでもわかるようにニツカリと笑った。

……なんとなく、最後のアドバイスは大きなふくみがあったように感じる。

死に戻り回数で、なんらかの分岐が発生することを匂わせられたのだろうか？

いや、ゲーム内のあらゆる行動が、その後の世界や自分自身の道ゆきに影響するということなのかもしれない。

公式サイトでも示唆されていたが、プレイヤーが考えているよりも開発者たちはずっと「本気」ということなのだろう。

ちなみに、死に戻り回数による分岐の記載はなかったと思う。

なにとはともあれ、なるべく死なないように気をつけよう。

最後に細々とした設定としてレーティングの制限をなくすことと、痛覚設定を上限いっぱいにするのをおすすめされた。グロも痛みもある程度は平気だと思うが……

レーティングの制限をなくすと、相手を傷つけたり、自分が傷ついたりしたときの損傷具合がほとんど現実と同じように見えるという。ゲームとはいえ、あまり見たいものではない。

痛覚は最大設定でも現実の痛みほどはないようだが、それなりの衝撃があるらしい。

「レーティングや痛覚設定を低くすると、膜を何枚か重ねたみたいになっちゃって、どうしても世界への没入感が損なわれてしまうんだよね。あわなかったらあとでいくらでも変更できるからさ、いったん私のオススメ設定でやってみない？」

「……なるほど。あとで変更できるならそれで大丈夫です」

了承すると、サポートA Iのオススメ設定にされたウィンドウが出現したので、目をおす。いわれたとおりのレーティングや痛覚設定になっていた。痛覚設定が少し不安だが……まあ、一回経験してみたら判断しよう。

あとは、接触範囲設定は プレイヤーキャラクター P C と ノンプレイヤーキャラクター N P C の項目があり、P C は若干制限されていたが、N P C は制限なしだった。

……なぜに？ うーん、まあ、いいか。これも不都合があったらあとで設定を変えればいい。

「はい、これで設定はすべておしまい！ あとは世界に飛びこむだけだ！ 準備はいいかな？」

サポートA I がパンツと手を打ちあわせて締めにかかろうとするが……

「あ、ちよつと待ってください」

「ん？ どうしたんだい」

さっきの設定画面のすみに、あるものを見つけてしまったのだ。

まだ世界に飛びこむわけにはいかない。

「ヘルプをひととおり読ませてください。読み終わったら飛びこみます」

「えっ……ぶっ、あつはっはっはっ！ げほっ、ごほっ、ひー……っ！」

サポートA I は一瞬キョトンとしたあと、腹を抱えて笑いだした。ときおりむせている。

僕だつて早くゲームの世界にいきたいので、笑いこぼるサポートA I の声をB G Mに、ヘルプにすみずみまで目をとおしていく。

いつでも読めるのはわかっているが、世界に飛びこんだらそこにも新たな本や書物があるはずだ。それならここで読めるものは読んでしまったほうがいいだろう。

「トウノ、きみ本当にサイコー……!!」

宇宙と青い星の狭間に、心底愉快そうなサポートA I の笑いがいつまでも響きわたっていた。



「それじゃあ、いってらっしゃーい！ ……んふうっ！」

まだツボに入っているらしいサポートA I に見おくられ、僕は今度こそ世界に飛びこんだ。

……本当に飛びこんだ。

どういふことかというのと、ずっと景色の一部になっていた青い星に向かって自由落下し始めたのだ。なんともいえない浮遊感のなか、徐々に視界が白んでいき――

気づくと、二本の足で地面に立っていた。……ずいぶんと、懐かしい感覚だ。

しばし二本の足で地を踏みしめる感覚に去来する複雑な感情を落ち着かせて周囲を見まわすと、レンガ造りの家々が建ちならぶ欧州の田舎町のような町並みがあった。

しかし、それにしてもやや不釣り合いに感じる人の多さが目につく。

おそらくここがRPGでお馴染みの『始まりの町』で、僕と似たような簡素な初期装備を身につけているのがPC、いわゆるプレイヤーで、そのほかの人々がNPC、この世界の住民なのだろう。ふと、視界のすみで点滅している主張の激しいアイコンがあるのに気づき、視線操作で聞く。ちなみに僕は視線操作に慣れているからそうしているだけで、タッチ操作や音声操作など操作方法はいろいろと選べる。

それはさておき、開かれたウィンドウを確認する。

【チュートリアルクエスト】

- ・職業ギルドに登録してみよう。
- ・職業ギルドでクエストを受注してみよう。
- ・クエストを達成しよう。

……

『チュートリアル』という名のとおり、この項目に従ってクエストをクリアしていけば、基本とな

るプレイの流れを把握できるようだ。

しかし、職業ギルドというものがどこにあるのかわからない。

とりあえず『職業ギルドに登録してみよう』という項目を選択すると、視界の左下にあるミニマップに目的地を示すマーカーが追加された。なるほど、この追加されたマーカーが示す場所に向かえばいいようだ。助かる。

さっそく目的地に向かって足を踏みだす。

……そんな単純なことにも感慨深くなってしまうていけない。

目的地に向かいながらマップのほかの箇所も見てみると、今僕が歩いている町を東西につらぬく大通り以外は、ほとんどグレーアウトと斜線が引かれていた。そのエリアには立ち入れないようだ。まあ、まだチュートリアルをなにひとつクリアしていないので、迷わないようにということかもしれないが、このゲームの触れこみを考えると少しだけ違和感を覚えた。

そして町全体の形が大雑把に描写おおざっぱされているが、どこになにかあるのかはほとんど記載されていない。

今確認できるのは、いくつかのギルドと武具屋と道具屋、宿屋がそれぞれ一軒ずつだ。さすがに最低限プレイに必要な施設は初めから訪れることができそうだ。

もしかしたら、自分の足で調べたり、それこそギルドで詳細な地図を手に入れたりしないと埋まらないのかもしれない。リアリティを謳うのなら、それらの行動の結果として詳細なマッピングがされていくというのは納得できる。

そのようなことをつらつらと考えているうちに、マーカールの打たれた場所に到着した。

見あげると、ほかの民家よりもひととき大きく立派な建物が建っている。プレイヤーと思しき人たちがつぎつぎとこの建物に入っていくので、ここが職業ギルドでよさそうだ。

さっそくギルドに足を踏みいれると、外観よりもさらに広々とした空間が広がっていた。

……絶対に外観の大きさと内部の広さがあっていない。

この世界ならではのファンタジーでマジカルな建築技術によるものなのだろうか？　ほかの建物も内部は拡張されているのだろうか？　建築の本があつたらぜひ確認してみたい。

それはさておいて、まずはここに来た目的を果たそうと、人だかりに目を向けた。

サービス開始直後ということもあつてか、思ったよりもたくさんあるすべてのカウンターに列ができています。みんなここでギルド登録をしているのだろう。

ひとまず、一番奥のカウンターの列にならぶことにした。思ったよりも早く列がはけていく。

このカウンターの受付は、僕とそう年が変わらない女性のようなのだ。にこやかかつテキパキと応対してプレイヤーの波をさばっている。

ブラウンの髪を低めの位置で結ってサイドに流し、同じくブラウンの目がくりっつとしていてはつらつとした印象がある。白いブラウスにブラウンのワンピースを着ていて、ほかのカウンターにいる女性と同じ服装をしている。男性はそれが白いシャツにブラウンのベストとスラックスになっているようだ。これがこのギルドの制服なのだろう。

そして優秀なギルド職員の手腕により、そう時間はかからず僕の番がきた。

「こんにちは、異人^{マレビト}さん！　ギルド登録ですか？　クエスト受注ですか？」

「……ギルド登録です」

あまりに無駄のない問いかけに、この一日で彼女が得た経験値がうかがえる。

ちなみに異人と書いて『マレビト』と読むらしい。異世界から訪れる存在なのだから、この世界の住民からしてみれば僕たちはまさしく異人だろう。

「それではこちらの魔道具に手をおいでください。……はい、登録が完了しました。こちらがギルドカードになります。初回の登録料、発行料はかかりません。紛失した場合は再発行が可能です。ランクに応じた再発行料をいただいております」

ギルド職員にうながされるままアンティーク風の箱に手をおくと、さくつと登録が完了した。掌紋認証のようなものだろうか？

そして、手渡されたギルドカードはステンレスのような見た目と質感のカードだった。

そこには先ほど設定した僕の個人情報のいくつかが記されていた。……まったく見たことのない、この世界の文字で。

面食らったが、文字をながめていると文字の意味が頭に浮かぶので、識字に問題はなさそうだ。今さらだが、ギルド職員との会話も問題なくできたので言語の壁はないらしい。なんとなく、こういうものは自国語で記されているものだと思っていた。

それにしても……僕は自国語を話しているつもりなのだが、淀みなくこの世界の言葉を話しているように聞こえているのだろうか？　たったこれだけのことで疑問が尽きない。

この世界の文字と意味を認識できるということは、がんばればシステムの補助がなくても読み書きができるようになるかもしれない。……それをあえてする必要はないのかもしれないが。

そのほかに、ギルドの活用方法や注意点の説明を受けた。これについては事前に読みこんだ公式サイトやヘルプとほとんど同じ内容だったので、復習といった感じだ。

「チュートリアルクエスト【職業ギルドに登録してみよう】をクリアしました」

視界のすみにそんなログが流れた。今は応対中なのであとで確認しよう。

「以上で登録時の説明は終了となりますが、このままクエストを受注していきますか？」

「いえ、クエスト受注はまだ大丈夫です。ところで、この町の情報が得られる資料などがあれば確認したいのですが、ありますか？」

まずはクエストよりも読みものがないかの確認からだ。

「この町に関する資料でしたら、このギルドの二階にある資料室でどなたでも閲覧可能です。資料の持ちだしは厳禁となっておりますが、書き写しなどは自由です。破損、紛失されると賠償金が発生しますのでご注意ください」

「っ！　ありがとうございます！　さっそくいつてみます！」

「は、はい。よい一日を！」

『資料室』という言葉に一気にテンションがあがってしまい、大きな声をあげてしまった。

豹変した僕の勢いにギルド職員の女性が若干引いていた気がしたが、読書の楽しみの前には些細なことなので、さっそくギリギリダッシュにならない程度の速さで資料室へ向かった。

入口のわきにある階段から二階へあがると、すぐに『資料室』と札がかけられた扉があった。

「おおっ！」

逸る心のままに資料室の扉を開くと、決して広くはない小部屋に縦に五列ほど、さらに壁一面に沿うように本棚がならんでいた。

そして、そのすべてにぎつしりと資料や本が詰まっていた——絶景だった。

このひとつひとつに、現実とはまったく異なる文字で思考や文化が記されているのかと思うと、それだけでこの世界に飛びこんだ甲斐があったというものだ。

かろうじて体面をとりつくるっているつもりだが、心中はテンションが上がりすぎてかなりの興奮状態となっている。

しかし最後の理性を総動員して、まずはこの町の情報や周辺の地理などが記されているような資料を探し始めた。町の情報資料はすぐに見つけることができたので、まずはその資料があった棚から攻めていくことにしよう。

——そうして僕は、読書に没頭していった。



「あのー……二日も資料室にこもってらっしゃいますが、大丈夫ですか？　その、体調とか……」
「……はっ。……はいっ」

深く集中して読書をしていると、突然だれかに話しかけられて我に返った。

とりあえず声がしたほうへ緩慢に顔をあげる。なんだか視界がぼやけて見づらいが、服装的にギルド職員だろう若い女性が心配そうに僕の顔をのぞきこんでいた。

ええと……なにをきかれたんだったか。

先ほどかけられた言葉を思い返ししながら、だんだん自分の状態がわかってきた。

「あー……すみません、ダメかもしれません」

「え!？」

テンションと欲望のおもむくまま資料室にある資料や本をかたつぱしから読みあさっていたのだが、なんとあれから二日も時間が経っていたらしい。

この部屋には最低限の明かりとりの窓しかなく外の様子がほとんどわからないのと、僕が集中しすぎていたせいで、時間感覚がだいふ狂っていたようだ。

ちなみにここでは現実の四倍の速さで時間が流れており、この世界の一日は、現実時間の六時間と同じだ。つまり僕は、現実時間換算で、十二時間ほど連続でプレイしていることになる。

そして我に返ると、ここに来たときは正常だった視界のふちが真つ赤になったり歪んだりしていて、あきらかな異常事態を知らせているのに気がついた。

原因はどうやら《空腹》と《不眠》というバッドステータスらしい。

一度気づいてしまうと、体の不調を一気に自覚してきた。視界は波打ったように歪んでいるし、

身体もフラフラとして制御がしづらい。どう考えても体調は大丈夫ではない。

そうして自分の状態を確認していると、ギルド職員の女性が困ったように頬に手をあてて視線を彷徨わせた。

「ど、どうしましょう！ 今は異人さんがたくさんいて大通りの宿屋はいっぱいだし、まだ夜明け前なので空いている食堂もないし……」

「だ、大丈夫です。食事は携帯食料があるので……ご迷惑かもしれませんが、そのすみで仮眠をとらせてもらえばそれで……」

確か最初から持っているアイテムに携帯食料があったと記憶しているので、あとは《不眠》をどうにかすれば問題ないだろう。そう思いギルド職員の女性に提案すると――

「そんなのはダメです!」

「えっ」

食い気味にたしなめられた。思いのほか強めの勢いに驚いて肩が跳ねる。

それによく見たら、声をかけてくれた女性はギルド登録のときに受付をしてくれた女性だった。

彼女は勢いのままに僕に迫る。

「そんな今にも倒れそうな顔色で粗末な食料と寝床なんて、よけいに体調が悪化します！ 少し遠いのは申し訳ないですが、ギルド裏から外壁に向かう途中にある宿屋なら、この時間でも食事をだしてくれまし部屋も空いているはずですよ。その女将さんに私、『カーラ』に紹介されたと伝えればお世話をしてくれると思うので、すぐに向かってください!」

「えっ。その……そこまでしてもらわなくても……」

回復したらずくに読書を再開したいと思っていたので、つい断ろうとしたが……

「すぐに！ 向かってください！」

「は、はい！ ご迷惑をおかけして申し訳ありません、お世話になります！」

ギルド職員の女性、あらためカーラさんのあまりの剣幕に、宿屋の紹介を受けてしまった。

いやまあ、ものすごくありがたい厚意なので断るほうが失礼だったんだが。本当に……

ということ、いまいち制御の利かない身体を引きずってなんとかギルドの外にでると、ギルド内からこぼれる光といくつかの民家（とち）に灯った淡い光、そして空に瞬く星くらいしか明かりがなく、かなり暗かった。そういえばカーラさんも夜明け前とかいていたな。

「私はまだ仕事があるので付き添えないのですが、おひとりで大丈夫ですか？ ちゃんとたどり着けそうですか？」

「はい、移動はできそうなので大丈夫です。お手数をおかけしてすみません、ホント……」

この数分のやり取りですっかりカーラさんに「ダメそうだな」認定されてしまったようで、彼女の僕を見る目が、心配な生徒を見守る小学校の先生のようなものになっている。

カーラさんに見送られ、僕は紹介された宿屋のほうへ足を踏みだした。

いつの間にかミニマップに新たなマークが現れている。カーラさんに紹介されたことで、自動で目的の宿屋にマークがついたらしい。これで迷わずにいけそうだ。

身体がフラつくので、慎重にゆっくりと移動する。

ギルドの入口に面した大通りは、こんな暗い時間帯にもかかわらずプレイヤーらしき人たちが活発に行き交っていたが、少し通りを外れると途端に人どおりが失せ、物音ひとつしない静けさに包まれた。

夜のひんやりと冷えた空気を大きく吸いこむと、フラつく身体やぼやけた視界がいくぶんマシになった気がして気分がいい。

……思い返すと、一日以上飲まず食わずによる空腹も、不眠も、現実で体験したことは一度もなかったかもしれない。いや、絶対にない。

当たり前だ。平均的な家庭の十歳はまずそんな状況にならない。小学校では給食がでるし、夜ふかしをしようとすれば親か保護者がとめる。

こんな状態になってからは生命維持機能の一貫で、決まった時間に強制入眠するようになってい

るし、栄養も身体につながれた管から補給されているので食事を自主的にとることはない。

ちなみに強制入眠時間まではまだ余裕はある。ダイジョブ、ダイジョブ。

「……ふふっ」

なんだか妙に楽しくなってきた、笑みがこぼれた。これが徹夜テンションというやつだろうか。踏みしめる地面の感触も心なしかふわふわしてくる。

さっきまで、とてもダルかったのになんとも不思議だ。

脳内物質によってこういうことが起こると知ってはいても、体験できるなんて思わなかった。あ

らためてものすごい技術だなあとぼんやりと思う。

徹夜テンションを楽しみながらも、歩行だけは慎重に進めることしばらく。

前方に明かりの灯った建物が見え、そこからなんともおいしそうな匂いがただよってきた。

ミニマップを確認すると、あの建物が目的地で間違いなさそうだ。

なんだかホツとする雰囲気があるなあ、とあまり働かない頭で考えながら扉に手をかけるが……

「……開かない」

押しても引いても開かない。引き戸の要領でもダメだった。

まだやっていると思っただが、もう店じまいしてしまったのだろうか？

扉を叩けばなかの人に気づいてもらえるだろうか——と考えたところで、突然ガコツと大きな音がして視界に光があふれた。まぶしくて目をつぶる。

「なにやってんだ、お前」

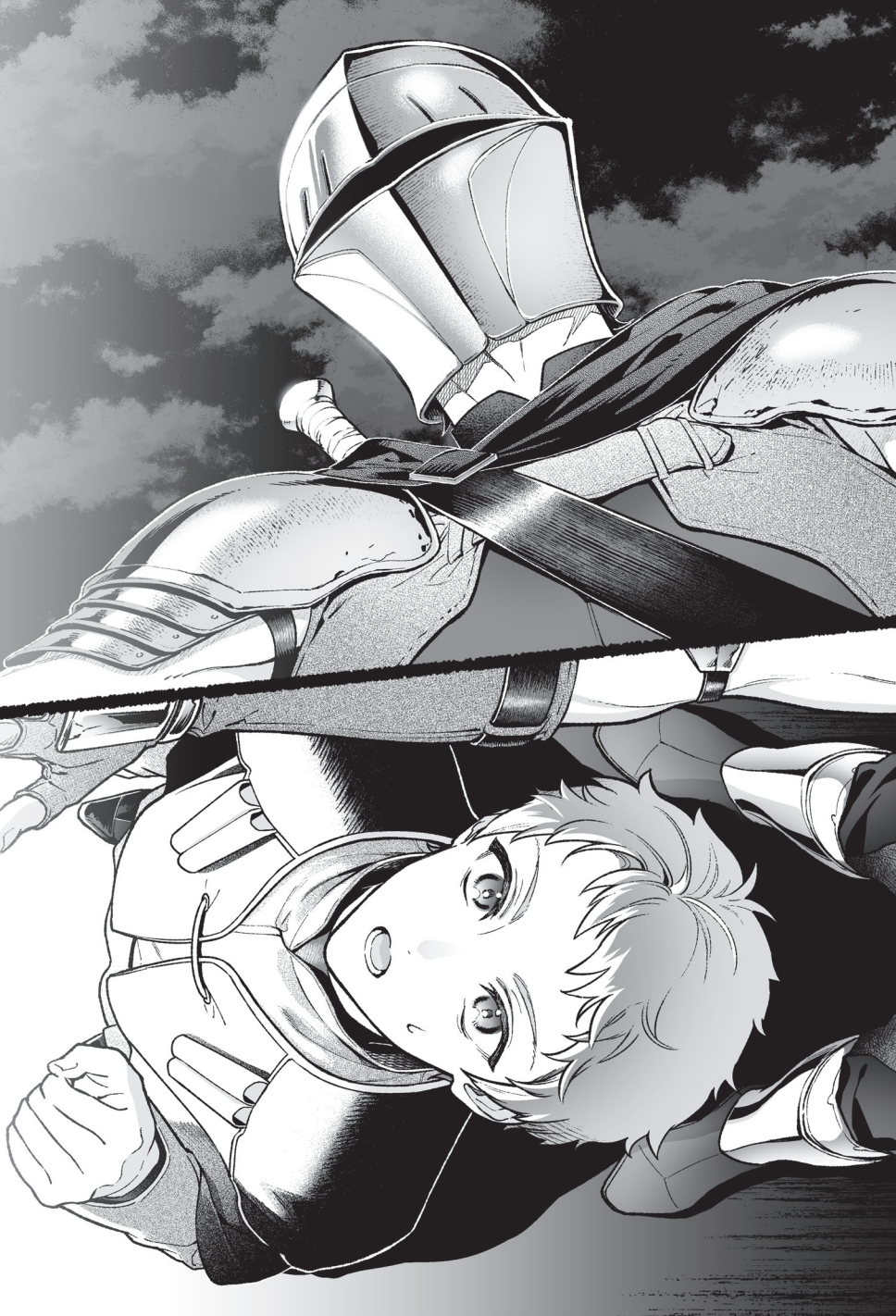
頭上後方から、不機嫌そうな低い声が降ってきた。

声のするほうを緩慢に見あげると、とてもたくましく体格のいい鎧姿の男性が立っていた。頭をすべて覆うタイプの兜をかぶっていて顔は見えない。

その男性が後ろから腕を伸ばして扉を開けていて、ほとんど覆いかぶさられているような体勢だ。

……なんとなくお互い見あっていると、扉の向こうから快活そうな女性の声が大きく響いた。

「あら、アンタ今日は何どってきたの。……おや？ 見かけない子もいるねえ。……まさか！ ア



ンタどつかからさらってきたんじゃないだろうね!？」

「俺だつて知るか。ここに突っ立ってたんだ。……邪魔だ。入らないならどけ」

そういうと鎧の男は僕のわきをすり抜けてさっさと奥へ入っていく。

背中に背負った僕の身の丈はありそうな大きい剣が印象的だった。

「突っ立ってたつて? ……ああ!」

扉の建てつけが悪くて、少し強めに押しこまないと開かないのよ! ここには粗野な野郎どもしか泊まらないからすっかり忘れてたよお!」

この宿の女将おかみと思われる、エプロンをつけた恰幅かっぴくのいい女性おんなは、そういうとほがらかに笑った。

……扉が開かなかったのは単純に僕のパワー不足だったらしい。

「さ、入んな!」

女将おかみさんにうながされて宿のなかへ入ると、広々とした食堂にとおされた。今は先に入っていた鎧の男おとこはいないらしく、がらんとしている。

「このとおり今はほとんど客がいないから、好きな席に座りなねえ」

僕はうなずいて窓際のひとり用の席に腰をおろした。

少しして席にやってきた女将おかみさんが、不思議そうな顔をして僕を見る。

「もしかしてアンタ、異人さんかい? アンタたち、こっちの通りに入ってこられるようになったんだね?」

「はい、僕は異人です。ほかの異人は……ほとんど入ってこられないと思います。僕がここにくることができたのは、ギルドに勤めているカーラさんに紹介されたからかもしれません」

あまり働かない頭で少し考えてからそう答える。

資料室で町の情報を手に入れたことで、どこの建物がなんであるかの情報は結構埋まったのだが、立ち入り可能エリアはほとんど拡張されなかった。

しかし、この宿はその立ち入り不可エリアのなかにある。ミニマップを確認してみると、大通りからこの宿に向かう道だけ立ち入り可能エリアになっていた。

そして、この宿のある道に入ってからプレイヤーらしき人物を一切見かけなかったもので、今のところ全員に開放されているわけではないと推測する。

となれば、僕とほかのプレイヤーの違いは、カーラさんにこの宿を紹介されたか否かだ。

「まあ! アンタあの子の紹介でここに来たのかい! カーラはアタシの娘なのよお。アンタはあれかい、あの子といい感じなのかい?」

途端に女将おかみさんが喜色をあらわにする。なるほど……いろいろと納得した。

とりあえずカーラさんの名誉のためにも、きつぱりと否定しておこう。

「いえ、そういう関係ではないです。ギルド内で倒れそうになったところを助けていただき……」

「えっ、なんだつて?」

そうして、僕はこの宿を紹介されるに至った経緯を説明した。

《不眠》のせいで口がうまくまわらず、いつもよりゆっくりと話したせいでそれなりに長くかかってしまった。

「アンタ、そんな満身創痍だったんだね……気がつかなくてゴメンよお。すぐにお腹にやさしいも

んを持つてくるから。食べ終わったら上の部屋でゆっくりしていつておくれ」

「ありがとうございます……」

これまでの経緯を説明し終えると、女将さんからも心配な子を身守る母親のような目で見られてしまった。女将さんとカーラさんとの血の繋がりを強く感じる。

食事を用意するために、女将さんはカウンターの奥にある厨房へ引っこんでいった。

なんとなく鎧の男のほうに目を向けると、革鎧をベースにとどころ金属で補強された鎧に身を包み、傍らにはあの大きな剣を立てかけていた。

そして全体的に赤茶けているというか、赤黒く汚れていた。

……もしかしなくても、なにかの生物の血液だろうか。全体的に赤黒いということは全身に血液をかぶったことになる。……いったいなにと相対して、なにを屠ってきたのだろう。

「うっ……？」

不意に、ピリツとした感覚が身体を駆け抜ける。

この感覚はなんだろうと首をひねっていると、僕が目に向けていることに気づいたのか、鎧の男がじつとこちらに顔を向けていた。

兜越しに視線が交わった気がしたつぎの瞬間、静電気で強く弾かれるかのようなビリビリとした感覚が僕を襲う。

兜をかぶっているので彼の表情も視線もよくわからないが、たぶん僕をにらんでいるんじゃないだろうか。そして僕は彼からのなんらかの圧力を感じているのだと思う。

現実をふくめても初めて体験する感覚にしばし身を浸す。身体が勝手に緊張して硬直するこの感覚、緊張感で萎縮するというのはこういうことなのか。

初めて体験するものではあるが、少し似たものを前にも感じたことがあるような……

「ちょっと！ 今にも倒れそうな坊やに威嚇なんて、大人気ないことしてんじゃないよ！ 叩きだすよ！」

「……チツ」

ぼんやりと思考の海に沈んでいると、奥の厨房から女将さんの喝が飛んでくる。

舌打ちのような音の直後に、全身を覆っていたビリビリとした感覚が消えたので、女将さんのいう彼の威嚇？ が緊張感の原因だったようだ。

僕が不躰にながめていたので、彼の痲に障ったのかもしれない。

「不快だったなら、すみません。気をつけます」

鎧の男のほうに向かって頭をさげる。それ以降はそちらに視線を向けないようにした。彼の反応はとくにない。これ以上関心を向けられたくないだろうから気にしないことにする。

「アンタ大丈夫だったかい？ うちの客は行儀がなってないからいけないよ」

女将さんがやれやれといった様子で、お皿の載ったお盆を持って厨房からできた。

「いや、僕も不躰にみえて、気を悪くさせてしまったかもしれないので」

「気を使えていい子だねえ……。ほら、豆と野菜のスープだよ。今日のところはこれで身体をあためて、明日になったらもつと精のつくものを食べな」

「ありがとうございます。おいしそうです」

「ふふっ、ゆっくり食べなねえ」

そういつて女将^{おかみ}さんは去っていった。

直後に、鎧の男が座っているほうからバコンツとなかなかすごい音がしたが、そっちに視線を向けないようにしているのにながら起こったのかはわからなかった。

目の前の湯気^{ゆげ}を立てたスープに視線を移し、木製のスプーンを手にとる。

そして、自然と両の手をあわせ……

「いただきます」

当たり前の習慣なのに、ひどく久しぶりのような不思議な感覚を覚えながら食前の礼を口にした。スープをひとつすくい口へ運ぶと、口の中に、やさしい味とあたたかさがゆるやかに広がる。

「……っ！」

そのスープはなにもかもやさしいものでしかできていないはずなのに、頬が、胸が、全身が燃えるように熱くなり、“なにか”がとんでもない激しさで身体中を駆けめぐったようだった。

その感覚にのたうちまわりそうになるのを必死で抑える。

しばらくその激流を堪え、ようやく落ち着いてスープ本来の穏やかなあたたかさだけを感ぜられるようになったころ、身体に残った最後の激しい熱を吐きだすように、ほうっと息をついた。

——生きてる。

それから、スープを最後の一滴までゆっくりと丁寧に味わった。

食事を終えると、女将^{おかみ}さんに案内されて空き部屋におおされた。

宿泊部屋は意外と広いものの大きなベッドが部屋の半分くらいを占めていて、残りは小ぢんまりとした机と椅子がおいてあるだけの飾り気のない簡素な部屋だった。

パツと見ても掃除は行き届いているし布団も清潔そうで、この宿屋全体に流れる雰囲気と同じでどこか安心する部屋だな、と思った。

女将^{おかみ}さんは「狭くてごめんねえ」などと笑っていたが、十分広いと思う。

なんならベッドはもう半分くらい小さくてもいいくらいだ。……まあ、あの鎧の男くらい身体が大きかったら、このベッドでちょうどいいのかもしれないが。

いよいよこの身体の体力の限界と現実の強制入眠時間が迫ってきたため、さっさと布団に潜ってログアウトをする。

こうして、僕のアルストプレイ一日目は幕を閉じた――



つぎの日、僕はゲームにログインする前に、ネットでアルストについて調べてみた。

すでに大手攻略サイトのいくつかが我先にと攻略情報をアップしている。

僕がギルドの資料室で読書に没頭しているあいだに、つぎの町へ進出したプレイヤーもいるよう

だ。それが早いことなのか普通のことなのかは、よくわからないが。

現在判明している職業一覧も見てみた。予想はしていたが、僕の職業は記載されていなかった。

まあ、こういうものは自己申告だろうから、網羅されるのはまだまだ先だろう。

技能一覧のほうには《分析》だけ載っていた。

どうやら『○○学者見習い』というような学者系の職業に就くと、デフォルトでついてくる技能のようだ。『○○学』は植物学に鉱物学、動物学など、ほかにもいろいろあるらしい。

その職業の人にはぜひそれぞれの分野を究めてもらって、研究成果を文書に残したあかつきには僕に読ませてほしい。

《記録》も学者系の職業の初期技能につきそうなのだが、なかったのだろうか？ まあ、そのうち嫌でも習得できそうだし、些細なことだろうか。

そして、昨日僕についたバッドステータスの《空腹》と《不眠》についても調べてみた。

《空腹》はスタミナの回復量が減り、徐々にLPを侵食し始める、というところまではヘルプにも記載があったと記憶している。

このLPとは『ライフポイント』の略で、いわゆるプレイヤーの生命力やほかのゲームでのHPにあたる。

そしてここからは有志によって検証された内容だが、これらのバッドステータスを放っておくと、そのままLPがゼロになって死亡してしまうらしい。身体操作も重りがついたように鈍くなるようだ。

……死ぬまで待つてみたのか。

それなりに放置したバッドステータスを経験した身からすれば、もしレーティングや設定まわりを全解放してあのかいけ感を味わうのは、なかなかつらいものがあると思う。これがライトノベルでもよく見かける検証班の執念か……。頭がさがる。

ちなみに《空腹》の解消方法は単純で、満腹度がプラスになるまで食べ物を食べることだ。

つぎに《不眠》だが、こちらはゲーム内時間で十五時間以上眠らずにいると蓄積が始まり、LPの回復量が減り、時間経過にしたがつて視界の歪みや狭まりといった症状がでてくる。

やがて身体のコントロールが利かなくなり、最終的には《錯乱》や《幻覚》などの状態異常がランダムに発生するようになっていく。

状態異常を解除しても《不眠》を解消しないかぎり、すぐに状態異常が発生してしまうようだ。

解消方法はログアウトするか、《睡眠》というコマンドでゲーム内で二時間ほど眠ったことにすることで解消するらしい。これも単純でお手軽だ。

ただし、《睡眠》はログアウトをしているわけではないため、一日の連続ログイン時間の上限に達すると、再度ログインするためには必ず現実で六時間空けないといけない。

連続ログイン上限に、ゲーム内換算三日の徹夜が限界で、これ以上《不眠》を続けるとどうなるのかは今のところ検証する術がないようだ。

……普通に死ぬんじゃないだろうか。状態異常の内容が妙にリアルだし。

ちなみに《不眠》でわかるように、バッドステータスと状態異常は別もので、バッドステータス

にはほかに《欠損》などがあり、こうしてみると身体の不調状態を表しているようだ。

僕の《不眠》は状態異常が発生するほどではなかったようだが、さすがにこれからは集中しすぎそうなときはアラームをかけるようにしようと思う。

サポートAIにもなるべく死なないほうがいいといわれているし。

なにより、仮想空間では容易に味わえなかった食事のおいしさ、あたたかさをもっと得てみたい。さて、ひととおり攻略サイトめぐりを終えたので、そろそろログインしよう。



昨夜泊まった宿屋の一室で目を覚ます。

ログアウト前のダルさや視界不良が嘘のように、クリアな視界と身体感覚だ。

気分爽快とはこのことだろう。現在はログアウトから一日半をすぎたところだろうか。昼と夕方のあいだの時間帯だ。

まず行動ログを確認してみる。

……《空腹》によつてLPが半分くらい減っていたらしい。本当に気をつけよう。

あとは宿屋での宿泊や食事など、いくつかのチュートリアルクエストをクリアしていたので、さくつと内容と報酬を確認してログを閉じた。

ほとんど必要のない身支度をして一階の食堂におりると、女将^{おかみ}さんがにこやかに迎えてくれ、時

間的にがつつりとしたものは難しいが軽食を用意する、といってくれた。

昨日と同じ席に座って待っていると、お盆を手にした女将^{おかみ}さんが僕のもとへやってきた。

「はいよ、パンとホットミルク。アンタが一日経つても起きてこないもんだからずいぶん心配したんだけど、大通りで異人を泊めてる仲間にきいたら『異人の眠り』ってのはそんなもんだってねえ。慣れてないからあわてちゃったよお!」

食事を僕の前におきながら女将^{おかみ}さんが話す。

『異人の眠り』……ログアウト中のプレイヤーのことを指しているのだろう。

「ご心配おかけしました……。そうですね、二日ほどはほとんど休まず活動できますが、そのあと一度深く眠ると一日から二日、あるいはもつと長く起きないこともあるかもしれません」

「はあー、同じ人系種族に見えて、やっぱりいろいろとアタシらとは違うんだねえ」

こちらの世界と現実の時差のせいで、女将^{おかみ}さんにいらぬ心配をかけてしまったらしい。だがプレイヤーを相手に商売をしている人は、早くも「そういうもん」扱いで順応しているようだ。たくましい。

というところで、女将^{おかみ}さんは清掃へもどり、僕はパンをかじってホットミルクで喉をうるおす。

うん、今日の食事にあたたかくておいしい。

「あ、そうだ。うちの娘が、アンタが起きたらギルドに顔をだしてほしいっていったよ。あの子も心配してたから、元気な顔を見せてやんな」

「そうですか……わかりました、そうします」

僕が食べ終わったところを見計らって女将^{おかみ}さんが声をかけてきた。カーラさんにはすぐくお世話になったので、ちゃんとお礼をいわないかと思っていたのでちょうどいい。

さっそくギルドへ向かおうと、空の食器の載ったお盆を女将^{おかみ}さんに持っていく。

「ご馳走さまでした。今日の食事もおいしかったです」

「あら、どうもねえ！ そうだ、宿はもう引き払うかい？ まだこの町にいるんなら連泊のほうが安くなるんだけど」

「本当ですか。払えそうならぜひ連泊したいです」

「そうかいそうかい！ うちの子によりやあアンタはまだこの町で一銭も使っていないはずだから、連泊代を払えるはずだっていったよお！」

「……確かに一銭も使っていないですね」

……カーラさんの洞察力がちょっと怖い。ギルドで異人には慣れてるし、実家の宿屋で人間観察を経験したたものだろうか。しかも、ちゃっかり実家の顧客も増やしているな？

まあ、この宿屋のあたたくて落ち着く雰囲気ですっかり気に入っているから、連泊できるのなら僕としてもありがたいのだが。

女将^{おかみ}さんに連泊代を支払い、サービス内容や注意事項をあらためて説明してもらった。

「うちは傭兵や冒険者が泊まることが多いから、一昨日のやつみたいなむさっ苦しいのしかないんだけど、そこはごめんねえ。粗暴^{ぶぼう}だけど気のいい奴らばかりだから」

「はい。とくに気にならないので大丈夫です」

「よし、いい子だ！ そういやまだ名前をきいてなかったねえ。アタシはローザってんだ、よろしくねえ！ アンタは？」

女将^{おかみ}さんの言葉に、そういえば名乗っていなかったなと気づく。

「僕はトウノといいます。よろしくお願いします」

「トウノね！ なんだか不思議な響きだねえ。あとアタシにもこの奴らにも丁寧な言葉つかいはいらないよ！ それが流儀^{りぎ}ってもんさ！ ほら！」

「えっと……わかった」

ローザにうながされて、戸惑い^戸つつも敬語をはずしてみる。

うーん……年上の人にタメ口をきくのはなんだか据わりが悪い……

「あつはつはっ！ 徐々に慣れなねえ！ ほら、娘^{むすめ}とどこにいつてきな！」

ぎこちないままの僕を、ローザは快活に笑いながら送りだしてくれた。

宿をでた僕は、あらためて宿の外観を観察した。

入るときは暗かったし視界も歪^{ゆが}んでいてよくわからなかったが、見た目は少し大きいくらいの普通の民家にしか見えない。

看板は宿屋共通と思われる意匠^{いしょう}の看板しかかけられていないし、マップの表記も「宿屋」としか書かれていなかった。

ふうむ……勝手に『ローザの宿屋』と呼ばせてもらおうか。

外観を確認したところで、さっそくギルドへ向かおう。

だがギルドまでの道があやふやだったので、マップを開いてギルドの場所を確認してから進む。といっても、ギルドへ向かう道以外はほとんど立ち入り不可なので、ある意味わかりやすかった。行きは真っ暗でほとんど見えなかった町並みが今はよく見える。大通りとくらべると人が暮らしている生活感が随所からにじみでている印象だ。

大通りはゲームプレイに必要な施設へのアクセスがよく、逆にいえば必要最低限の施設しかない。しかし、こうしてプレイヤーと住民の生活範囲をわけることで、プレイヤーが大量に流れこむことによるトラブルを未然に防いでいるようにも見える。観光地と居住区の住みわけといったイメージだろうか。

そんなことをつらつらと考えているうちに、昨日行き倒れかけた職業ギルドに到着したので、なかに入って目的の人物を探す。

「あ！ トウノさん！」

ふと名前を呼ばれてそちらを見ると、資料を抱えたカーラさんがいた。

「一昨日は大変お世話になりました。いい宿も紹介していただいて……」

「いいんですよ、顔色もよくなったようで安心しました」

礼を伝えると、カーラさんは朗らかな笑顔で応じてくれた。

「なにかお礼ができないかと思っていたんですが、僕にできることってありますか？」

プレイを始めたばかりの僕になにができるかわからないが、雑用でもなんでもいいのでお礼をしたい。

するとカーラさんは目をキラリと光らせた。

「実のところ、その言葉を待っておりました！ トウノさんにぜひやっていただきたいことがあるんです！」

「そうなんですか。为什么呢？」

「こんなところで話すのもなんですので、あちらのカウンターへどうぞ。あ、それとこの世界では平民同士ならだれに対しても丁寧な言葉づかいはいりません。私たち受付担当の者は面倒ごとの回避でこの言葉づかいにしているだけです」

「さっきローザさ……ローザにもそういわれた。善処し、する……」

「ふふ、すぐ慣れますよ。さあ、こちらです」

デジャヴかな？ というやりとりをしながら、カーラの案内でカウンターへ移動する。

「ではさっそく、当ギルドからトウノさんへ指名依頼をさせていただきますのですが、指名依頼の説明は必要ですか？」

……通常のクエストもまだ受けたことがないので、どうして僕に指名依頼を？
そんな疑問が浮かびつつも、こくりとうなずく。

「ギルド登録をしたときにカーラが説明してくれたから大丈夫だと思う。強制ではないがなるべく

受けてほしいこと、通常の依頼に比べて報酬や評価が上乘せされる、だったかな」

「そういえばトウノさんのギルド登録は私が対応いたしましたね。はい、その認識で大丈夫です。では依頼内容についてですが、トウノさんにはこのギルドに集まった情報をまとめて、資料にしたいですね」

「ほう」

カーラがいうには、この数日急激に増加した異人と活発な依頼消化によって、ギルドに報告される情報が激増した。それ自体はよろこばしいことなのだが、その情報をまとめる人手が圧倒的に不足しているのだという。

ギルドとしては、この数日の環境変化を一刻も早く把握したいが、あまりうまくいっていないとのこと。

「ふうむ……依頼内容とギルドの切迫感^{せつぱくかん}は理解できたが、それでなぜ僕に指名依頼を？」

「それは、トウノさんがこの問題の解決に必要な技能を有しているからです。《分析》と《筆記》か《記録》をお持ちじゃないと、つらい物量になると思いますので」

「なるほど……」

確かに僕は《分析》と《記録》を持っている。まだ使用したことはないが。

気になることといえば……これらの技能がないとつらい物量とは？ ……まあ、この短期間に流れこんだプレイヤーの人数を考えると「お察し」というやつなのだろうか。

「実のところ、トウノさんの職業でもある『編纂士』^{へんさんし}という職業をまったくきいたことがなかった

のですが、ギルドの記録をひっくり返してみると記載があつたんです。ギルド創立時に、そういうギルドの記録や情報なんかをまとめる仕事をしていたのが『編纂士』^{へんさんし}なんだそうです！ これはもうアークトゥリアのお導きなんじゃないかと思ってトウノさんにお声がけしました！」

「そ、そうなんですか」

僕の職業がギルド創立まで遡^{さかのぼ}らないと確認できないほど稀有^{けう}な職業だということが、さらっと判明した。レア職業だろうとは思っていたが、それほどは。

まあ、それはともかくとして……

「まだ『下級』で『見習い』なんだが、それは……」

「必要な技能があれば、そうむずかしい依頼ではないので大丈夫ですよ。経験値がおいしい仕事でも思ってください。……あ！ あとギルドの報酬も多めにだしますので、宿屋にももっと長く泊まりますよ！」

「ふつ、それなら否やはないな」

そもそも読みものにたくさん触れられそうだから、力不足でなければ断る気はなかったのだが、カーラはこちらのモチベーション^{モチベーション}を的確にあげてきた。

仕事の問題解決と同時にこちらの満足感をあげながら実家の継続利用顧客を増やすこの手腕。かなりのやり手のようだ。

「ふふふ！ それではよろしくお願いしますね」

カーラがそういうと、視界のすみに通知が流れた。

〈職業ギルド指名クエストを受注しました〉

〈チュートリアルクエスト【職業ギルドでクエストを受注してみよう】をクリアしました〉

【職業ギルド指名クエスト】

ギルドに集められた情報をまとめて資料を作成し、ギルドへ提出しよう。

依頼者…始まりの町『ユヌ』の職業ギルド 進行度…0% 期限…残り7日

報酬…1000G、職業ギルドランク上昇、ユヌの防衛力上昇（微）、ユヌ近郊安全度上昇（微）、資料室所蔵資料の限定的貸出許可

クエスト受注の意志を示したことで、クエスト受注中を示すアイコンとともにクエストの詳細な内容が表示された。

……最後のとつてつけたような報酬は、僕以外に喜ぶやつがいるのだろうか？ いや、これは指名依頼だから、僕が喜ぶような報酬が追加されているのかもしれない。

職業ギルド、というかカーラに完全にツボを押さえられている。一昨日の件で、いろいろと察したのだろう。

ほかの報酬内容についても、通常の依頼よりも割がいいように思う。もらえるゴールドだけを見ても、攻略サイトに載っていた初期に受注できるどのクエストよりも金額が高い。

あとはこのプレイヤーが最初に放りこまれる始まりの町『ユヌ』の安全度もあがるらしい。あ

るということはさがることもあるのだろうか。そして現状の安全度はどの程度なのだろうか。

まあ、安全度があがるに越したことはないから、それはいいか。

当然、僕としては待望の報酬『資料室所蔵資料の限定的貸出許可』を得るために、しつかり依頼をこなすつもりだ。

「それではさっそく依頼を進めますか？」

「ああ、よろしく頼む」

「わかりました！ 作業用に奥のデスクを確保してあるので、こちらへどうぞ」

カーラにうながされ、受付カウンターの端の入口からカウンターの向こうへ入る。

「ん？」

カウンターのなかに入った瞬間、ギルド内が大きくざわめいた気がした。

もしかして入ってはいけなかったのだろうか。しかし周囲のギルド職員は気にする素振りはなく、カーラもどんどん奥へ進んでいってしまうので、とりあえず気にせず足を進めることにした。

そうして奥にある紙束が乱雑に積まれていてごちゃつとしたエリアで、彼女の足がとまった。

「ギルさん！ 編集士^{へんさん}のトウノさん、依頼を受けてくれましたよ！ 資料作りの流れを教えてください！」

「な、なんだってー！？ ……ああ、アークトゥリアよ、感謝します……」

カーラがひととき紙束が高く積まれた場所に声をかけると、紙束の向こうからガタタンツという音とともに、よろこぶ男性の声がきこえてきた。……未だ姿は見えない。

「ほら、ギルさん。そこにいたらトウノさんに紹介できないですから。トウノさん、こちらうちの職員のなかで唯一《筆記》を持っていたがために、今回地獄を見ているかわいそうなギルさんです。こう見えて一応、このギルドのサブマスターなんですよ」

「は、はあ……」

こう見えてもなにも、姿が見えないので判断のしようがないんだが……と紙束の山を見つめていると、その向こうから細長い影がひょっこりと現れた。

「やあ、私はギルという。カーラくんの紹介のとおりこのギルドのサブマスターだが、このとおり馬車馬のように働かされているので気軽にギルと呼んでくれ」

そういつてギルは、へらりと笑った。

ギルは全体的に細長い印象の疲れた顔をした中年手前ほどの男性だ。金髪というよりは少し褪せた茶色の髪が長めに伸びていて、年齢からか疲労からかうるおいをなくしてより萎縮っぽい。瞳の色は目が細いので見づらいが、髪の色と似た色のようなだ。

サブマスターということで、ギルの服装はほかのギルド職員の制服よりも少しだけ装飾が多い気がする。……服のほうもギルと同じくくたびれてるが。

ヒラの職員たちとも距離が近いのか、気安い雰囲気だ。

「……どうも。下級編纂士見習いのトウノ、という。よろしく」

「ではトウノくんと呼ばせてもらおう。よろしくね！」

「それではトウノさん、ギルさんに資料作りのやり方を教わってください。あ、あと倒れる前に中

断して宿で休んでくださいね！」

「……ぐ、わかった」

さらっと僕に釘を刺してから、カーラは受付カウンターへもどっていった。

「よし、じゃあさっそくやり方を説明しようか。まずおおまかな流れだけど、ここに積まれている紙束がすべてクエスト消化の過程で得られた情報の山になっている。それをトウノくんの場合はつぎつぎ《分析》していつて、《分析》した結果をその白紙に《記録》すると、情報がまとまった文書ができるよ。どうだい、簡単だろうか？」

「……ああ、流れの把握はできたと思う、んだが、僕はまだ一度も技能を使ったことがなくて、ちゃんと使えるか自信がない」

技能使用のチュートリアルをなにも進めていないので、発動の仕方などもわからないのだ。

……むしろこの会話こそが技能使用のチュートリアルなのだろうか？

「おや、そうなのかい？ ああ、そういえばトウノくんは異人だったねえ。大丈夫、最初のうちは私もサポートするよ。それに異人はものすごい早さで成長するようだから問題ないだろう」

「そういうことなら……やつてみよう」

きいた感じ、ちゃんと技能さえ使えれば僕にとつては楽な作業だと思う。

というかこの作業、そもそも《分析》がないと詰む気がひしひしとしている。《筆記》しかないギルがやるのは、大分厳しいだろう。

そんな僕の同情の視線に気づかずに、ギルが技能の使い方を説明してくれる。